

【2019年6月16日付 紀州新聞掲載分】

シリーズ「結核」①

「結核について」

独立行政法人 国立病院機構 和歌山病院
副院長 駿田直俊

今回から、結核のお話となります。

「結核は昔の病気でしょ、今でもあるの?」と思われる方も少なくないかもしれませんが、日常診療の中で、まだまだ忘れてはいけない大切な疾患の一つです。和歌山県では平成30年の1年間で130人の結核の発病患者さんがいました。咳やタンがなかなか止まらない、微熱が続く、食欲が低下した、何となく元気がない、などで医療機関を受診し、胸部写真などで結核が疑われ、喀痰検査などで診断されます。

結核について理解いただきたい点として、まず肺結核として発病した場合、咳により家族や職場の中で感染する(人から人に移る)可能性があるということです。周りの人につさないためには、早めに診断し、治療を開始することが必要となります。結核菌の排出が少ない時点で治療を始めると周りへうつす心配も低くなります。

もうひとつ重要な点は、高齢者(特に80歳以上)からの発病が圧倒的に多いという点です。結核はからだの中に入ってすぐに発病することはまれで、若いころに(現在の80歳以上の高齢者が若いころは今よりもっと多くの結核患者さんがおり、うつされる機会は今以上に多かったと考えられます)からだの中に入ったものの、その多くはからだの中で静かに生きています。そして、高齢になって抵抗力が落ちてきた、糖尿病・腎臓病・がんなどにさらに抵抗力を低下させる病気になってしまった、リウマチやがんなどで免疫を抑える治療を始めた、などの抵抗力が落ちた状況で、今まで静かにしていた結核菌が活動を始め、発病するため、高齢者からの発病者が多くなります。

咳や微熱が長く続く、おうちのおじいちゃんおばあちゃんが何となく元気がないなどの場合、一度かかりつけの先生にご相談いただければと思います。また、若い人からも発病する場合があります。若いひとでも咳がなかなか止まらない場合は受診されることをお勧めします。

結核は正確に診断し、決められた標準的治療を一定期間行うことで治る病気で、決して怖い病気ではありません。うつる・うつされるという心配についても一定の決まり事を守っていれば決して大騒ぎをする心配もありません。大切なのは、早く診断し、治療を始めることです。

次回より、引き続き、結核についての検査や治療などについてお話が続きます。